

## 精神医学講座

講座担当教授	：繁田 雅弘	老年精神医学
教 授	：中村 敬	精神病理学, 森田療法
教 授	：宮田 久嗣	精神薬理学, 薬物依存
教 授	：須江 洋成	臨床脳波学, てんかん学
教 授	：忽滑谷和孝	総合病院精神医学
教 授	：布村 明彦	老年精神医学
准 教 授	：山寺 亘	精神生理学, 睡眠学
准 教 授	：館野 歩	森田療法, 比較精神療法
准 教 授	：井上 祐紀	児童思春期精神医学, 神経生理学
准 教 授	：品川俊一郎	老年精神医学
准 教 授	：鬼頭 伸輔	精神生理学, ニューロモデュレーション
講 師	：伊藤 達彦	総合病院精神医学, 精神腫瘍学
講 師	：川上 正憲	精神病理学, 森田療法
講 師	：小高 文聰	精神薬理学, 神経画像学
講 師	：稲村 圭亮	老年精神医学

## 教育・研究概要

## I. 老年精神医学研究会

老年精神医学研究会では、老年期の疾患を通じて精神症状のメカニズムの解明と病態モデルの構築を目指すこと、そしてそれらを治療戦略に応用し、患者と社会に還元することを目的として、基礎研究と臨床研究を行っている。

布村明彦は認知症発症過程における神経保護的ストレス反応調節因子 REST と酸化ストレスの研究を継続して行なっている。品川俊一郎はウイルス学講座との共同研究として DNA メチル化を指標とした認知症のバイオマーカーの研究を継続している。また、前頭側頭葉変性症の早期診断法開発および自然歴に影響する臨床・遺伝因子の探索に関する多施設共同研究、そして認知症者等へのニーズ調査に基づいた「予防からはじまる原因疾患別の BPSD 包括的・実践的治療指針」の作成と検証ための共同研究を継続している。

稲村圭亮は軽度認知障害および軽度アルツハイ

マー病患者における認知症の行動・心理症状と関連因子の調査を行い、行動・心理症状が ADL 低下に及ぼす影響についてまとめている。互 健二は放射線医学総合研究所において変性疾患や精神症状のタウイメージングに関する研究を継続して行っている。

## II. 森田療法研究会

森田療法を立脚点にした精神病理学的・精神療法的研究を継続している。2019 年度は計 14 題の学会発表を行った。医局内の検討会では外国語文献の抄読を行い、今年度もその一部を「精神療法」誌の海外文献抄録に掲載した。

中村 敬は日本精神神経学会・精神療法委員会の事業として、若手精神科医に向けた基本的な面接技法の研修プログラム・教材を他学派の精神療法家と共同で開発している。久保田幹子らは日本森田療法学会の事業として、外来治療の効果研究を推進した。館野 歩は入院森田療法を実施した強迫症患者に対する自閉スペクトラム傾向が治療効果へ与える要因について研究を継続している。矢野勝治は高齢者の患者に対する森田療法の応用について、谷井一夫は入院森田療法におけるうつ病の回復要因について研究を進めている。鈴木優一はひきこもり症例に対する森田療法の技法研究を継続している。なお矢野勝治、谷井一夫は今年度メンタルヘルス岡本記念財団より各 30 万円の研究助成を受けた。

## III. 薬理生化学研究会

薬理生化学研究会は、基礎研究と臨床研究の両面から研究を行っている。基礎研究においては、宮田久嗣が公益法人喫煙科学研究財団の助成研究において、帝京大学大学院文学研究科心理学部部門との共同研究で、薬物依存の動物モデルを用いて、薬物依存にかかわる脳内神経回路の研究（依存性物質の報酬効果に対す嫌悪効果の影響：報酬効果の変容と、依存形成のメカニズム）を行った。

臨床研究においては、宮田久嗣と山田理沙（大学院生）が、厚生労働科学研究費補助金の研究において「ギャンブル障害における精神科併存症の臨床的意義」を行った。小高文聰は文部科学省科学研究費基盤研究 (C) により、治療抵抗性うつ病を対象とした反復経頭蓋磁気刺激 (rTMS) 前後の rs-fMRI による機能的結合の変化を探索した。石井洵平は統合失調症の回復を予測する社会・生育因子の検討を行い、研究成果を学位論文にまとめている。

#### IV. 臨床脳波学研究会

昨年度よりてんかんセンター化に向けワーキンググループによるミーティングを重ねてきたが、学会の施設基準は満たすものの、緩徐なセンター化をめざすとの新病院体制の運営方針の転換から、残念ながらセンター化は見送られる状況となった。月1回定期的に集まっている脳神経外科、小児科、精神科、神経内科のてんかんに関わる先生方および電気生理担当の技師さんによるカンファレンスは継続して行っている。これら各科および外部でてんかん診療にかかわる慈恵関係の先生方とともに、現在、てんかん診療に関する本の出版を考えている。なお、本学で開催した第12回てんかん学会関東甲信越地方会の際の発表を山越尚也は症例報告としてまとめ、現在投稿を準備している。

#### V. 精神生理学研究会

本研究班は、脳波、心電図、筋電図、眼球運動、呼吸運動などの生理学的指標を同時測定する終夜睡眠ポリグラフ (Polysomnography) を、精神医学研究の主な方法論とする。精神生理学に加えて、概日リズム研究である時間生物学、そして、睡眠学 (Somnology) を立脚点とする。睡眠学は、1. 睡眠科学、2. 睡眠医歯薬学、3. 睡眠社会学から構成されるため、精神医学が生物学的・心理学的・社会的側面を有するのと同様に、広範な研究対象および手法が存在する。

本年度は、昨年度に引き続き、各種研究補助金を受けて、当講座各研究会、本学他講座や他学と連携して、研究活動が継続された。その成果は、国内外の学会で報告され、専門雑誌に掲載されている。

#### VI. ニューロモデュレーション研究会

ニューロモデュレーションは、電気・磁気・薬物によって神経機能を修飾し、症状を緩和させることである。精神神経科領域では、特に電気・磁気によるモダリティをさすことが多い。

班のミッションは、おもに侵襲性の低い rTMS を選択し、国内外の企業と連携しながら、アンメットニーズに応じた医療機器開発およびレギュラトリーサイエンス研究を推進している。班活動の成果は、「Neuropsychopharmacology Reports」, 「Neuropsychobiology」, 「Psychogeriatrics」, 「Psychiatry and Clinical Neuroscience」の各誌に投稿され、受理されている。また、日本うつ病学会治療ガイドライン作成ワーキンググループメンバーとして、高齢者のうつ病ガイドラインの作成に寄与した。

#### VII. 総合病院精神医学研究会

本研究会では毎月1度、本院にて研究会を継続して開催し、うつ病再発予防教室、緩和ケア、コンサルテーション・リエゾンの3つの領域を柱として、研究を進めている。

研究会のメンバーが多く所属する柏病院では臨床研究として、老年精神医学研究会の稲村圭亮と共同して岡部 究が認知症におけるBPSDとADLとの関連を調査して発表を行った。引き続き介護負担をテーマとした研究を行う予定である。

#### VIII. 精神病理・精神療法・児童精神医学研究会

2019年度は、学会発表報告会2019と題して2演題の発表と検討会を開催し、活発に質疑応答が行われた。今後もオープンな研究会の開催を企画し、学内外に開かれた学問を展開し、精神医学講座における精神病理・精神療法の発展に寄与していきたい。

川上正憲は、研究中の「現代における生の欲望(森田正馬)に関する研究」の一端を、日本精神病理学会第42回大会にて発表を行い、現在論文化して投稿中である。沖野慎治は、第60回日本児童青年期精神医学会総会にて、「休息入院により治療の進展が見られた解離性障害の不登校女児の1例」を発表した。瀬戸 光は、日本デイケア学会第24回年次大会札幌大会にて、「公益財団法人復光会総武病院デイケアでの家庭教室の取り組み-支援者と当事者の繋がりを家族が見守ること-」を発表した。

#### IX. 臨床心理学研究会

毎月1回定例の研究会を行い、5月に「心理臨床の集い」を開催した。第29回心理臨床の集いでは、上智大学総合人間科学部心理学科教授の松田 修先生を講師にお迎えして、「WAIS-IV (Wechsler Adult Intelligence Scale-4th Edition) の新しい点と臨床への活かし方」というテーマでレクチャー頂いた。松田先生は予めよりWechsler知能検査の研究開発に携わって来た方で、日本版WAIS-IV刊行の中心メンバーでもある。会には心理士だけでなく、医師や作業療法士など職種からの参加も多く、大変盛況であった。また機会を設けて精神疾患や脳科学に紐づけた解釈の仕方や臨床的な活用法についてご教示頂きたいと考えている。

#### X. 発達行動医学研究会

当研究会は子どもと大人の発達障害と行動医学に関する臨床・基礎研究を行うグループとして立ち上げた。この分野の権威である内外のゲストを招いて

勉強会を行うほか、ADHDの認知行動療法の輪読会 (Solanto MV. Cognitive-Behavioral Therapy for Adult ADHD: Targeting Executive Dysfunction. New York; Gilford Press, 2013) を定期開催している。研究活動としてはADHD治療薬投与前後における脳活動の変化を近赤外線スペクトロスコピー (NIRS) を用いて計測し、治療効果判定のバイオマーカーとしての可能性を追求する研究を開始した。

### 「点検・評価」

2019年度に入り、従来の9部門に加えて「発達行動医学研究会」が発足され、さらに研究活動の範囲は広がった。発達障害の治療的アプローチは昨今の精神医学の臨床・基礎研究には欠かすことのできない視点の一つであり、今後の研究成果に期待をしたい。従来からの研究会では、研究成果の発表が各所属学会で数々行われており、十分な活動が行われていると思われる。また、その研究活動のための研究費も、獲得が厳しい現状の中で積極的に申請が行われている。一方、各活動分野を越えた新規の研究テーマ確立は依然課題となっている。臨床・教育と並行しながら、限られたマンパワーの中でも、当講座だからこそ発信できるユニークな計画を創造するためには、活発な意見交換を行う土壌を更に作り出す必要があると思われる。

## 研究業績

### I. 原著論文

- 1) Miyata H, Takahashi M, Murai Y, Tsuneyoshi K, Hayashi T, Meulien D, Sorensen P, Higuchi S. Nalmefene in alcohol-dependent patients with a high drinking risk: Randomized controlled trial. *Psychiatry Clin Neurosci* 2019; 73(11): 697-706.
- 2) Kito S, Miyazi M, Nakatani H, Matsuda Y, Yamazaki R, Okamoto T, Igarashi Y. Effectiveness of high-frequency left prefrontal repetitive transcranial magnetic stimulation in patients with treatment-resistant depression: a randomized clinical trial of 37.5-minute vs 18.75-minute protocol. *Neuropsychopharmacol Rep* 2019; 39(3): 203-8.
- 3) Nagata T, Shinagawa S, Yoshida K, Noda Y, Mimura M, Nakajima S. Early improvements of individual symptoms with antipsychotics predict subsequent treatment response of neuropsychiatric symptoms in Alzheimer's disease: a sub-analysis of the CATIE-AD study. *J Clin Psychiatry* 2020; 81(2): 19m12961.
- 4) Nagata T, Shinagawa S, Shigeta M. The time-dependent trajectory of neuropsychiatric symptoms in patients with dementia. *Psychogeriatrics* 2020 Feb 7. [Epub ahead of print]
- 5) Inamura K, Shinagawa S, Tsuneizumi Y, Nagata T, Tagai K, Nukariya K, Shigeta M. Clinicodemographic and psychosocial factors related to presentation or severity of delusions of theft among females with amnesic mild cognitive impairment and Alzheimer's disease. *Clin Gerontol* 2020 Jan 26. [Epub ahead of print]
- 6) Okabe K, Nagata T, Shinagawa S, Inamura K, Tagai K, Nukariya K, Shigeta M. Effects of neuropsychiatric symptoms of dementia on reductions in activities of daily living in patients with Alzheimer's disease. *Geriatr Gerontol Int* 2020; 20(6): 584-8. Epub 2020 Mar 31.
- 7) Matsuda Y, Furukawa Y, Yamazaki R, Inamura K, Kito S, Nunomura A, Shigeta M. Mirtazapine-induced long QT syndrome in an elderly patient: a case report. *Psychogeriatrics* 2020 Jan 23. [Epub ahead of print]
- 8) Matsuda Y, Kito S, Igarashi Y, Shigeta M. Efficacy and safety of deep transcranial magnetic stimulation in office workers with treatment-resistant depression: a randomized, double-blind, sham-controlled trial. *Neuropsychobiology* 2020; 79(3): 208-13. Epub 2020 Jan 17.
- 9) Tagai K, Nagata T, Shinagawa S, Shigeta M. Anosognosia in patients with Alzheimer's disease: current perspectives. *Psychogeriatrics* 2020; 20(3): 345-52. Epub 2020 Jan 12.
- 10) Takaesu Y, Utsumi T, Okajima I, Shimura A, Kotorii N, Kuriyama K, Yamashita H, Suzuki M, Watanabe N, Mishima K. Psychosocial intervention for discontinuing benzodiazepine hypnotics in patients with chronic insomnia: a systematic review and meta-analysis. *Sleep Med Rev* 2019; 48: 101214.

### II. 総説

- 1) 繁田雅弘. 【老年期における不安】軽度認知障害およびアルツハイマー型認知症に伴う不安. *老年精医誌* 2019; 30(4): 393-8.
- 2) 中村 敬. 森田療法の現状とさらなる展開 確立から100年を迎えて. *新薬と臨* 2019; 68(11): 1 455-9.
- 3) 宮田久嗣. 【「国際疾病分類第11回改訂版 (ICD-11) の社会精神医学的意義」】ICD-11における依存と嗜癮の概念再編. *日社精医誌* 2019; 28(2): 139-46.
- 4) 山寺 亘. 不眠症の非薬物療法の実際. *ねむりマネー*

ジメント 2019; 6(1): 10-3.

- 5) 井上祐紀. 【発達障害と認知症をめぐって】 ライフスパン・ディスオーダーとしての発達障害. 精神医 2020; 62(2): 121-9.
- 6) 鬼頭伸輔. 【反復経頭蓋磁気刺激 (rTMS) 療法の適正使用について】 反復経頭蓋磁気刺激 (rTMS) 療法の適正使用指針 実施施設基準, 実施者基準など. 精神誌 2019; 121(5): 384-7.
- 7) 品川俊一郎. 【知っておきたい稀な精神症候・症候群 - 症例から学ぶ -】 進行性非流暢性失語. 精神科治療 2019; 34(増刊): 205-7.
- 8) 稲村圭亮. 【老年期における不安】 老年期の身体症状および関連症群の臨床. 老年精医誌 2019; 30(4): 386-92.
- 9) 岩下正幸, 小曾根基裕. 高齢者精神科診療・認知症診療における薬物療法を考える (No.12) 高齢者の不眠症に対する睡眠薬の臨床. 老年精医誌 2019; 30(10): 1157-65.
- 10) 植草朋子, 品川俊一郎. 【新時代「令和」の前頭側頭葉変性症はいずこへ】 総論 前頭側頭葉変性症の症候学. 老年精医誌 2019; 30(10): 1089-98.

### Ⅲ. 学会発表

- 1) 鬼頭伸輔. (シンポジウム 2: うつ病治療の新たな試み) 気分障害への反復経頭蓋磁気刺激療法と最近の話題. 第 2 回日本うつ病リワーク協会年次大会福井大会. 福井, 4月.
- 2) 繁田雅弘. (大会長講演) 聴くだけでなく, 察するだけでなく. 第 20 回日本認知症ケア学会大会. 京都, 5月.
- 3) 中村 敬, 繁田雅弘. (シンポジウム 12) 高齢者に求められる精神療法とはどのようなものか. 第 115 回日本精神神経学会学術集会. 新潟, 6月.
- 4) Yamada R, Miyata H. (Symposium 32: Symptomatic Characteristics and Treatment Strategy of Gambling and Gambling Disorder) Clinical characteristics of psychiatric comorbidity in gambling disorder in Japan. ICBA 2019 (6th International Conference on Behavioral Addiction). Yokohama, June.
- 5) 山寺 亘. (シンポジウム 32: Stepped care を見据えた不眠障害治療の最前線) 不眠障害治療の Stepped care model. 日本睡眠学会第 44 回定期学術集会. 名古屋, 6月.
- 6) 館野 歩. (ポスター) 《日本森田療法学会》森田療法の 100 年 - 成立から現在まで. 第 115 回日本精神神経学会学術集会. 新潟, 6月.
- 7) 鬼頭伸輔. (委員会シンポジウム 27: 国内におけるうつ病への rTMS 療法の現状と課題) rTMS 療法の導入と現状. 第 115 回日本精神神経学会学術総会. 新

潟, 6月.

- 8) 品川俊一郎. (シンポジウム 21: 定型的な薬物療法に行き詰まった時の新たな治療戦略 - 難治性精神症状への挑戦 -) 定型的な薬物療法に行き詰まった時の新たな治療戦略: 認知症の BPSD に対して. 第 115 回日本精神神経学会学術総会. 新潟, 6月.
- 9) 稲村圭亮. (シンポジウム 9: 高齢者の精神療法と心理社会的ケア) 高齢者の身体症状症に対する介入: 「心気症状」に対する洞察および疾患モデルからの解釈. 第 34 回日本老年精神医学会. 仙台, 6月.
- 10) 稲村圭亮. (シンポジウム 12: 高齢者に求められる精神療法とはどのようなものか) 認知症患者に対する心理・社会的介入としての精神療法. 第 115 回日本精神神経学会学術総会. 新潟, 6月.
- 11) 岩下正幸, 山寺 亘. (シンポジウム 32: Stepped care を見据えた不眠障害治療の最前線) 併存不眠症に対する CBT-I の有効性に関する検討 - 原発性不眠症との比較 -. 第 44 回日本睡眠学会定期学術集会. 名古屋, 6月.
- 12) 互 健二. 放射性リガンド <sup>18</sup>F PM-PBB3 の脳内タウイメージング製剤としての臨床的有用性に関する研究. 第 58 回千葉核医学研究会. 千葉, 6月.
- 13) 天谷美里, 小曾根基裕. (シンポジウム 45: 平成 30 年度診療報酬改定後のベンゾジアゼピン系睡眠薬の減量) 睡眠薬減量の動機づけ動画作成の試み. 日本精神神経学会第 115 回定期学術総会. 新潟, 6月.
- 14) Utsumi T, Kodaka F, Matsuda Y, Yamazaki R, Amaki Y, Shigeta M. Automated or semi-automated region of interest analyses in individual space for Alzheimer's disease: a comparison of three methods. Alzheimer's Association International Conference (AACI) 2019. Los Angeles, July.
- 15) Kameyama H, Sugimoto K, Inamura K, Ozone M, Nukariya K, Shigeta M. J-point attenuation by antidepressant. Could venlafaxine-induced j-point attenuation be a biological marker that predicts responses to psychiatric treatment? 第 66 回日本不整脈心電学会学術集会. 横浜, 7月.
- 16) 館野 歩, 鈴木優一, 谷井一夫, 矢野勝治, 樋之口潤一郎, 塩路理恵子, 中村 敬, 繁田雅弘. 入院森田療法を施行された自己臭恐怖の臨床的特徴について. 第 10 回国際森田療法学会. 蕪湖, 8月.
- 17) Iwashita M, Yamadera W, Shimazaki H, Hotchi A, Ishii J, Suzuki T, Itoh H, Shigeta M. A comparison of the effects of CBT-I between primary insomnia and comorbid insomnia. Word Sleep 2019 (The 15th World Sleep Congress). Vancouver, Sept.
- 18) 小高文總. (シンポジウム 15: 創薬と神経画像研究) 安静時機能的 MRI を用いた, 統合失調症の治療維持

期における抗精神病薬の至適用. 第49回日本神経精神薬理学会. 福岡, 10月.

- 19) 松田勇紀, 鬼頭伸輔. (シンポジウム12: TMSの臨床応用) Hコイルを用いた深部経頭蓋磁気刺激によるうつ病治療. 第49回日本臨床神経生理学会学術総会. 福島, 11月.
- 20) 平林万紀彦. (シンポジウム3: 高齢者の痛み-特色をふまえた治療アプローチ) 高齢者特有の慢性痛にどう対処するか~痛みは脳で修飾される~. 第32回日本老年麻酔学会. 倉敷, 2月.

#### IV. 著 書

- 1) 中村 敬. 第3章: 精神療法が根をもつこと. 井上和臣編著. 精神療法の饗宴. 東京: 誠信書房, 2019. p.76-95.
- 2) 布村明彦. 第II部: 老年期の精神科臨床で遭遇する疾患と臨床神経病理 第1章: アルツハイマー病. 日本老年精神医学会監修, 入谷修司編. 認知症専門医のための臨床神経病理学. 東京: ワールドプランニング, 2019. p.31-9.
- 3) 中村 敬, 本田秀夫, 吉川 徹, 米田衆介編. 日常診療における成人発達障害の支援: 10分間で何ができるか. 東京: 星和書店, 2020.
- 4) 山寺 亘, 伊藤 洋. 各論 II: 非薬物療法 3. 精神療法. 内山 真編. 睡眠障害の対応と治療ガイドライン. 第3版. 東京: じほう, 2019. p.151-5.
- 5) 常泉百合, 品川俊一郎. 【臨床に役立つエッセンス】 9. 抗うつ薬や抗精神病薬を投与する際の注意点は? 高齢者の認知症・うつ病と関連疾患31のエッセンス: プライマリケアで診る. 東京: 医歯薬出版, 2019. p.53-9.

## 小 児 科 学 講 座

講座担当教授:	井田 博幸	先天代謝異常
教 授:	大橋 十也	先天代謝異常 (遺伝子治療研究部に出向中)
教 授:	浦島 充佳	臨床疫学 (分子疫学研究部に出向中)
教 授:	和田 靖之	小児感染免疫学
教 授:	勝沼 俊雄	小児アレルギー学
教 授:	宮田 市郎	小児内分泌学
教 授:	川目 裕	先天異常 (遺伝診療部に出向中)
教 授:	加藤 陽子	小児血液腫瘍学 (輸血・細胞治療部へ出向中)
准 教 授:	齋藤 義弘	小児感染免疫学
准 教 授:	小林 博司	先天代謝異常 (遺伝子治療研究部に出向中)
准 教 授:	田知本 寛	小児アレルギー学
准 教 授:	小林 正久	先天代謝異常, 新生児学
講 師:	秋山 政晴	小児血液腫瘍学
講 師:	高畠 典子	小児消化器
講 師:	日暮 憲道	小児神経学
講 師:	平野 大志	小児腎臓病学
講 師:	櫻井 謙	先天代謝異常

### 教育・研究概要

#### I. 代謝研究班

本年度も引き続きライソゾーム病の遺伝子治療に関する研究を行った。対象疾患はムコ多糖症II型、ならびにGM1 ガングリオシドーシスである。今年度はヒト造血幹細胞への遺伝子導入の最適化を行った。半自動的に遺伝子を細胞に導入できる機器である CliniMACS Prodigy を購入し、ヒトへの投与を見越してタカラバイオ社の研究室内に設置した。結果、ヒト造血幹細胞を含む CD34 陽性細胞に、レンチウイルスベクターを用いて効率よくムコ多糖症II型の欠損酵素遺伝子を導入できる系を立ち上げることに成功した。また、JCR ファーマ社との共同研究で、血液脳関門通過型酵素を発現するアデノ随伴ウイルスベクターを開発し、GM1 ガングリオシドーシスモデルマウスで試験をしたところ期待の持てる効果を確認した。さらに、厚生労働省のライソゾーム病研究班にも参画し、ガイドラインの作成、レジストリーの構築、患者への最新治療に関するアンケート調査を行った。